

～種子浸種～育苗時の留意点！！（昨年を踏まえ）～

1 気象予報（2月25日気象庁公表）

（1）暖候期予報（夏6月～8月）

- ・気温は、並～低い確率30～40%，6月～7月は平年と同様に曇りや雨の日が多い。
- ・その後も、平年に比べ晴れの日が少ない。（平年並～多い確率40%）

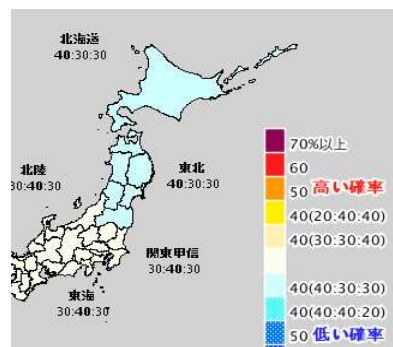
<夏(6月～8月)の気温、降水量の各階級の確率(%)>

【気温】	東北地方	40	30	30
【降水量】	東北地方	20	40	40

<梅雨の時期(6～7月)の降水量の各階級の確率(%)>

【降水量】	東北地方	30	30	40
-------	------	----	----	----

■ 低,少 ■ 並 ■ 高,多



（2）3ヶ月予報（3月～5月）

〔夏(6月～8月)の平均気温が低い確率40%の地域〕

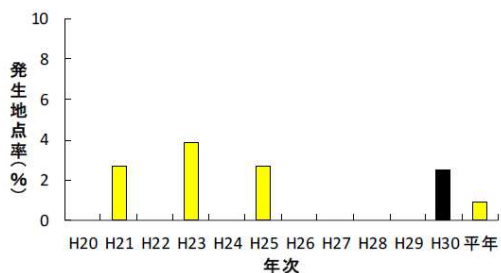
- ・3月 平年と同様に晴れの日が多く、気温の高い確率60%，降水量の多い確率ともに40%
- ・4月 数日の周期で変わり、同様に晴れの日が多く、気温の平年並または高い確率ともに40%
- ・5月 天気は数日の周期で変わるでしょう。

<向こう3か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>

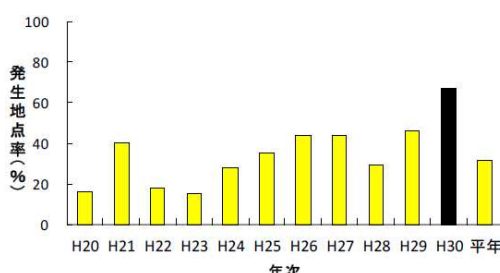
	【気温】	【降水量】
3月	10 30 60	30 30 40
4月	20 40 40	30 30 40
5月	30 30 40	30 40 30

2 2018年の育苗障害

- ・異常高温（下記図表参照）で、ばか苗病や細菌性苗腐敗症（籾枯れ細菌病等）が多発した。
- ・3月から育苗期間の天候は高温が予想されており、十分な注意が必要である。
- ・育苗施設の巡回調査で、細菌性苗腐敗症の発生が5年ぶりに確認された。（防除所）
- ・ばか苗病は近年増加傾向で、昨年は過去10年で最も発生地点が多い状況だった。（同）

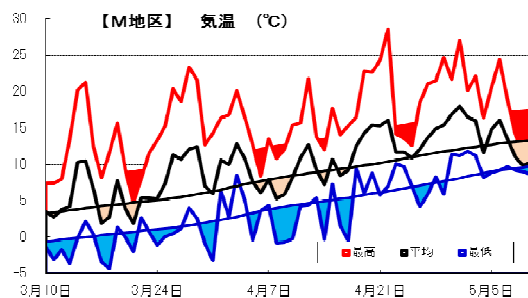


イネ細菌性苗腐敗症の発生地点率の年次推移



イネばか苗病(育苗期)の発生地点率の年次推移

〔参考：2018 年の天候〕



育苗期間中最高気温が20℃を超えた日数

月	I地区	M地区	H地区	F地区	W地区
3月	1	5	3	2	4
4月	5	10	4	10	8
5月	3	5	4	3	3
合計	9	20	11	15	15

3 種子浸種～育苗管理（病虫害防除所）

〔共通事項〕

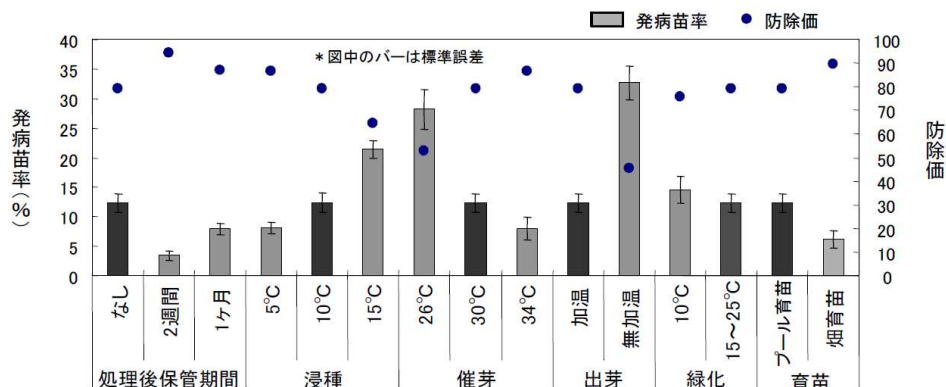
- ・塩水選，種子消毒を確実に実施し，育苗箱は消毒して使用する。
- ・例年発生が多い所では，防除効果の高い化学合成農薬の使用を検討する。
- ・温湯浸漬法による種子消毒は，決められた湯温，浸漬時間を厳守する。
- ・生物農薬は，低温条件では有効成分の菌が活動を停止するので，十分な効果を発揮させるため，極端な低温に注意する。さらに温湯浸漬法との体系処理を行い，防除効果を高める。
- ・昨年の異常高温により，浸種中の温度が上がり，蔓延を招いたと思われる事例が多かったことから，温度をこまめに計測し適切な温度管理に努める。

（1）細菌性苗腐敗症

- ・浸種から育苗中の高温（30℃以上）や床土が過湿になると発病が助長される。
- ・適切な温度管理が不可欠で，出芽後も高温にならないよう育苗ハウスの開閉をこまめに行い，過かん水を避ける。
- ・プール育苗を行うと，加温・無加温出芽ともに苗立枯細菌病の発生が抑制される。
- ・プールへは最初の湛水時期を出芽直後とし，その後は常時湛水状態に保つ。

（2）ばか苗病

- ・温湯浸漬法の場合，発生が心配な場合は 63℃，5 分間処理とする。
- ・温湯浸漬後の種もみは，浸種，催芽，出芽の過程でばか苗病菌に感染する可能性がある。
- ・ばか苗病菌は，もみ殻，稲わら等にも付着しており，作業場や育苗ハウスは清掃に保つ。
- ・温湯浸漬法や生物農薬は，出芽時の低温により防除効果が低下するので，加温出芽とするか，無加温出芽の場合は被覆資材などにより保温に努める。



種子管理および育苗管理の違いがばか苗病の発生に及ぼす影響